

---

# 東方白黒堂

僧侶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方白黒堂

### 【Nコード】

N6211S

### 【作者名】

僧侶

### 【あらすじ】

東方香霖堂からの二次創作。カップリング要素を含むので嫌いな人は見ない事をお勧めします。後、東方の二次創作は初めての体験でありますので、様々な所に設定の穴があると思いますが優しく見守っていただけると幸いです。

後、出来るだけ評価、感想等いただけると欢喜します。ではよろしくお願いたします。m( )m

## 第一章

ここは幻想郷と呼ばれる幻想の都。外界から切り離された幻想が今も住まう場所。四季折々の美しい景色の移ろいが見る者に蠱惑的な魅力を感じさせる。

そこには今も闇が存在し、息をひそめて人間を待っている。妖怪が住まい、人間がそれを恐れる過去の日本のあり方がそこにはある。そこには人間の人間らしい姿があった。現代の日本の人間達が人間らしい生き方をしていないというのではないが、この場所に流れ着く本などによれば、他者との顔を突き合わせたコミュニケーションも疎かになっていると聞く。

それは余りにも悲しいことではないだろうか？確かに効率性を重視すれば其方のほうがいいと言えるのかもしいが、そこには過去の人間が作り上げた所謂、幻想の美が存在しない。

いや、美が幻想になってしまったからこそ、幻想の都であるここはこれほどまでに美しいのか？現在の外界に頼っているばかりの幻想郷のあり方が正しいとはとても言えないが、いずれ外界に行くこの身としては、稚拙な言い方ではあるが、美しくあつて欲しいと願う。まあ、その日が何時になるかは、自分の知る所ではないが、其れまでは外の道具に数多く触れ、本を読み自らの知識を磨き上げておきたい。

では、そろそろ開店するでしょうか。何時いかなる時でも、僕は全てを受け入れる。何故なら、ここは幻想郷の中心なのだから。

『ある日の古道具屋の日記』より

文々。新聞より抜粋

雑多に置かれる古道具。そこには一つの共通点もない。

ガラクタにしか見えない物や鋭く輝く刀や、怪しく辺りを映す鏡など様々である。

その中心には仏頂面で本を読み続ける男の姿があった。眼鏡の中には鈍く光る金色の瞳。銀色の髪は人間でない事を他者に伝える印となっている。年の頃は二十代といったところであろうか。あくまで人間に置き換えてみると、であるが。

男の名前は森近 霖之助という。自分でつけた名前である。

霖之助はこの奇妙奇天烈な道具が並ぶ店の主であった。店の名前は『香霖堂』。いずれ幻想郷一の道具屋になる場所である。まあ自称であるが…

## 第1章 来客

カラン、カランとカウベルが軽快な音を鳴らし、来客を告げる。しかして、顔を上げた霖之助が見たのは、客ではない

「よう、香霖。相変わらず黴の生えるような生活をしてるようだな。

」

「ご挨拶だね、出口は今、君が入ってきた所だよ。」

入ってきたのは、魔理沙であった。彼女は霖之助の妹分のような者であるのだが、どうにも落ち着きがない。

それが魔理沙らしさではあるのだが、毎度振り回される身としては、もう少し静かにしてほしいというのが本音だ。

「面倒くさいから、また妖精を呼ぶような事にはならないでね。」

「おや、霊夢もいたのか。二人一緒に来るなんて珍しいね。また鍋でもする気なのかい？」

季節は既に春であり、まだ寒さが残っているが、鍋が恋しくなるような季節ではない。それに見た所、材料も持っていないようである。

「今日は花見に誘いに来たんだぜ。」

魔理沙が言う。しかし、それに少し霖之助は疑問を覚えた。

「まだ、桜も咲いていないだろう。庭の桜なんて、まだ蕾もつけてないんだよ。」

「いや、神社の桜がな、もう満開なんだ。紫は、今年の冬は暖かかったからとか言ってたぜ。」

なるほど、あの妖怪が言っているのは、外の世界の話であろう。幻想郷の今年の冬がやけに寒かったのは、寒さが幻想入りしたという事なのだろう。そして外の世界と近い神社は幻想郷より外の影響を強く受けたという事か。

「なるほどね。霊夢が今年の冬、全然来なかった理由が分かったよ。それにしても早いな。まだ雪も残っているじゃないか。」

「あら、私が香霖堂に来なかつたのは違う理由よ。それに冬は寒くなくちゃ。お茶が最も恋しくなるんだから。」

「夏でも熱いお茶を飲んでいる奴がよく言っぜ。でも、理由があつたのは本当だぜ。ほら、霊夢だけじゃなくて、私もあんまり来なかつただろ。」

「確かにそうだね。おかげでストーブの燃料の減りが少なくて済んだよ。二人が忙しかつたというとか何か異変だつたのかい？」

それ位しか彼女たちが忙しい理由は見当たらない。案の定魔理沙はその通りだぜと言つて頷いた。

「まあ、異変つて呼ぶほどの事じゃないんだけどね。今回は強い妖怪通りがぶつかつたから厄介な事になつたのよ。」

「鬼とか亡霊とか、紫とかだぜ。」

なる程、厄介である。主に紫が。鬼などは話してみると気さくであったり、亡霊と言うとあの半霊を名乗っていた子の上司であるだろう。僕が雪かきもとい、勉強をさせた事も分かつた上で花見に誘つてきたのだから教養のある人なのだろう。

ふむ、厄介だな紫。

「では今回の花見はその解決祝いと言つた所か。そんな所に僕が行く必要はないだろう?」「いや、そんな事はない。つていうか香霖が来ないといけないらしいぜ。後、会つてないのは香霖だけつて言つてたからな。」

「まあ、そいつのせいで今回の異変もどきが起こつただけだね。」

「やれやれ、説明もなく異変の首謀者に会わせようというのかい? 君達らしいといえばらしいがね。だか、僕は嫌だよ。騒がしいのは嫌いだし、それに鬼までいるんだらう? 何をされるか分かつたものじゃない。」

「あ……いや、来たほうがいいと思うぜ。わざわざ、ここまで会いに来るかもしれん。」

どうやら、彼女たちもその首謀者を嫌っているらしい。面倒事は起こしたくないと目で語っていた。それに霖之助はその彼女たちの様子に少しばかり興味が湧いた。比較的誰とでも付き合える彼女たちですら嫌うその変人とはどんな奴であろう。と見てみたくなったのだ。

ちよつと霖之助さんと似てるかもと言った霊夢の呟きは聞き流しておいた。

「しょうがない。君達が頑張ったんだ。解決の手助け位してあげようじゃないか。」

そう言つて二人の頭を撫でる。二人の反応は別々で魔理沙は「子供も扱いするな」と言つて顔を真つ赤にして僕から顔を背ける。霊夢はくすぐったそうにしていたが、やがて慣れたのか目を細めて気持ち良さそうにしていた。猫を思い出して、思わず喉を掻いてやろうかと思う様だった。やはり兄貴分としては、頼られるのは嬉しいものなのだ。弾幕ごっこは遊びであると分かっているながらもつい心配になってしまう。まるで子を心配する親のようだなと家庭を持ったこともないのに考えてしまう。魔理沙に言ったらまた「子供扱いるな」と怒られそうなものだが…

仕方ないと溜め息を吐きながら重い腰をあげる。

その溜め息に若干の楽しさを含めて……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6211s/>

---

東方白黒堂

2011年10月8日23時29分発行